
東方早咲桜

ダメな奴はダメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方早咲桜

【Nコード】

N2261M

【作者名】

ダメな奴はダメ

【あらすじ】

八雲 紫が偶然見つけた記憶喪失の少女。

少女の秘めたポテンシャルに気づいた紫は少女を幻想郷に招待するが、その目的は……？

追記 現在、この話の一部設定変更、文章見直しをした改修版を執筆中です。

プロローグ 雨と紫（むらさき） （前書き）

この物語は東方projectの二次創作です。
基本的に原作再現ですが、二次設定や矛盾点などが多く発生して
ます。

それでもいい方は、どうぞご覧になって下さい。
下手くそでスイマセン。

修正版に変更しました。

プロローグ 雨と紫（むらさき）

「もしもし、そのアナタ」

降りしきる雨の中、後ろから聞こえた声に反応し、私は後ろを振り向いた。

いつの間にかいたのかそこには紫を中心にした色合いの服を着た金髪の女の人が傘を差してうすら笑みを浮かべていた。歳は少女と大人の中間辺りか・・・。

いつの間にかいたのだろうか、その女性は再び私に問い掛けてきた。
「この惨劇をやったのはアナタかしら？」

惨劇・・・、そう言われて私は周りを見渡した。

私の周囲には人のようなものが数体、雨に濡れて転がっていた。
動く気配はまったくくない。

全身に切り刻まれた痕跡があり、これらは既に息絶えた死体だとすぐに分かった。

真新しい傷口からは既に大量の血が流れて出ており、それが雨水に混ざり水たまりを形成している。

この人達は数分前まではまだ生きていたのだろう。

中には辛うじて人型を留めている死体や、真つ二つに裂け原型がない死体もあった。

そしてこの人達を殺したのは・・・、

「・・・私が・・・殺したの・・・？」

殺したかどうかは覚えていない。そもそも私はさっきまで何をしていたのだろう・・・？

気がついたら・・・あの女性に声をかけられる前までの記憶が思い出せない・・・。

しかし、やはり私がこの惨劇を行ったかもしれない。血まみれになった両手、返り血を浴びて赤く染まった簡素な白い服と体、この状況を見たら誰だって私が大量殺人をしたと見てしまうだろう。私に人を殺した自覚がなかるうと・・・。

「アナタ・・・、自分が何をしたのかよくわかってないみたいね・・・」紫の服を着た女性は物珍しそうに問い掛けてきた。実際にはその通りである。私は本当に何をしていたのだろう・・・？

「アナタ・・・名前は何？」

名前？突拍子もなく聞かれた質問に少し戸惑いながらも、私は女性の質問に答えようとした。

しかし・・・、

「私は・・・えっと・・・・・・・・・・名前は・・・」
なんだろう？

私はなんて名前なのか分からない、どうやら私は自分の名前すら覚えていないみたいだ。

頭の中に霧が掛かったみたいになんて思いつけないのだ。

「私はなんて名前なの・・・？」

私は思わず知ってもいないはずの女性に聞いた。

「私に聞かれても困るんだけど？」

苦笑いしながら女性は答えた。

私は本当に何なのだろうか？ここに理由も、殺しをしたかどうか、そして自分の名前すら覚えていない・・・。

「アナタ、これからどうするの？」

女性の質問に対し、

「分からない・・・」

私は弱々しく答えることしかできなかった。記憶がない今、私にはアテがなかった。

だけどここにいる訳にもいかない、

私はここから遠くに逃げなければいけない、そんな気がする。どちらにしろ人を殺したかもしれないので逃げることは必須である。でもどこに逃げればいいのか・・・。

「行くアテがないんだつたら私について来ない？」

女性から発せられた一言に私は正気かと疑った。

「・・・いいんですか？私は人殺しをしたんですよ。」

「でもアナタがやってない可能性もあるんでしょう？それに私も訳ありの存在でね。」

女性は扇子を口元に当てクスクスと笑って答えた。

考えてみれば殺人現場や死体をみても驚かず、それどころか常時薄ら笑いを浮かべ続けるこの女性の得体の知れなさは不安になる。

それでも私には断る理由が思い付かず、気が付いたらただ一言だけ呟いていた。

「・・・お願いします」

「成立ね。それじゃ早速」

女性は手に持った扇子をおもむろに掲げ

「スキマよ開け」

と言いながら横に振った。

すると何もない空間に振った軌道にそって裂け目ができ、数秒後には女性の前の空間に大きな穴が空いたのだった。

目の前で起きた有り得ない出来事に私はただ呆然とするしかなかった。

この人が言っていた「訳あり」とはこのことだったのだろうか。

「怖がらなくていいわ。さっこちらに・・・」

女性が手招きしながら大穴にはいつて行く。そこで私は初めてこの女性の正体を知りたくなった。

「待ってください！あなたは何者なんですか？」

「・・・あら？私としたことが自己紹介を忘れてたわね。」

女性はクスクスと薄ら笑いをしながら、おかしそうに答えた。

「私の名は八雲
紫、^{ゆかり}
ただの胡散臭い妖怪よ。」

1 名前と桜（前書き）

読みづらいつと感想で多く言われたので、今回は読みやすさを目指してみました。

まだ読みづらいつ上に話の内容がグダグダしていますが、どうかよろしくお願ひします。

後タイトルを勝手に替えてしまいました。迷惑だつたらすいません。

1 名前と桜

自らを胡散臭い妖怪と言った八雲 紫さんにつれられ、私はよくわからない空間を紫さんと共に歩いていった。

周りを見渡せばあちこちに目がありとても気味が悪い。紫さんは慣れているのか気にせずどんどん歩いていく。私もただ黙ってついて行く、この空間を行き来する亀裂を自在に作れると自ら言っていたが、そんな事ができる紫さんはさすが妖怪と言った所か、ちなみにあの亀裂を紫さんはスキマとよんでいる。

すると目の前にさつきと同じスキマが現れた、しかしさつきと違いそのスキマから眩しい光がもれていた。

「もうすぐでつくわよ」

そう言っていると紫さんはスキマに入っていく、私もそのスキマに飛び込んだ。

そこは沢山の緑豊かな自然が広がっており、空は清々しい快晴で、見たこともない景色が広がっていた。その素晴らしい風景は初めて見たような気持ちになった。

「良い所でしょう」

紫さんが自慢げに話す。こんな所は見たことがない。まあ記憶がないからかも知れないが……。

「ここはどこですか？」

紫さんに聞いてみる。

「ここは幻想郷、すべてを受け入れる楽園よ」

「幻想郷……」

「そう、忘れ去られた者達が行き着く場所よ……、さあ、付いてきなさい、私の家で色々教えてあげるから」

紫さんの家……と言うより屋敷が目の前に見え始めた。結構大きめの屋敷で立派な庭もあるみたいだ。

と、玄関から一人の女性が駆けてきた。遠目から見てもこの人はただの人間ではないと一目でわかった。

ぱっと見は青い服を着た金髪のお姉さんだけど、後ろから九本の尻尾生えていて、被ってる帽子の中には動物の耳のような出っ張りが出ていた、その女性はこちらに向かってきて目の前まで来ると紫さんに向け頭を下げた。

「お帰りなさいませ、紫様」

頭を上げた女性の耳や尻尾を時々ピクツと動いており、本物だと分かった。

「ただいま藍、この子がさっき伝えた子よ」藍と呼ばれた女性は私をしばし見た後再び頭を下げた。

「始めまして、私は八雲 藍と言います。紫様の従者をしています。あなたの事は紫様からの連絡でしっております」

頭を上げた藍さんはにっこりと笑って挨拶をしてくれた。

「所で藍、お風呂の準備は出来てるかしら」

「今丁度いい湯加減になってます。着替えも用意出来てます」

紫さんはこれから風呂に入るつもりなのだろうか？

「それじゃあアナタ、家についたら早速入りなさい」

「てことは私がお風呂に入るんですか？」

「そうよ。アナタ今の自分の姿見てなにも思わないの？」

着ている白い服は泥だらけの血まみれで髪も同じ状況であった。

ここに来るまでよくしゃみ一つしなかったなと自分の体に関心し、ひよっとしたら結構丈夫にできているかもしれない。

大きめの風呂場で体の汚れと疲れを綺麗に落とした私は、変わりの服を着て居間に通された、そこでしばらく楽にしていると紫さんに言われたので言葉に甘えさせて貰った。紫さんは藍さんと話があるといって奥に行ってしまった。

私の今後の事だろうなと思いつつ寛いでいた私はふと庭を見ると

ある花の木が目に入った。その木には沢山の薄い桃色の花が咲いており、私はその花の木から目が離せなくなった。

「綺麗でしょ。あの花」いつの間にか来ていたのか、紫さんが私の座って話しかけてきた。

「あの桜の木はね、私の友人の庭に沢山あったのを一本貰ってきて植えたのよ」物思いにふけた顔で紫さんは話を進める。

「あの桜はこの辺りじゃ一番早く咲くの、だから私は春一の桜と呼ばれているわ・・・なんのひねりもない名前だけど」そんな話を聞きながら私は桜の木を眺め続けた。

「ところでアナタ、名前は思い出せそう？」紫さんが尋ねてきた事で私は自分が記憶喪失だった事を思い出した。

いまだに私は名前や記憶が思い出せない、なんとか思い出そうとするがやっぱり頭の中は霧が掛かったみたいに真っ白で・・・。

「・・・まだみたいね」

「お恥ずかしながら、そうみたいで・・・」

私は照れながらもそう答えるしかなかった。紫さんはやはり、といった顔で私をみた後こうきりだした。

「名前がないと色々不憫でしょ、私が考えてあげる」

紫さんが考え始めたのと同時に、藍さんがお茶と茶菓子を持ってきてくれた。そのお茶も茶菓子も大変美味しく、私は夢中で食べていた。まるで久しぶりに美味しい物を食べた気分だった。

そして紫さんが私の名前を思い付いてくれた。

「色々考えたけど、アナタにはあの名前がいいと思うわ」紫さんが扇子で指した先には、先程の桜の木があった。

「桜・・・ですか？」

私は疑問視しながら聞いてみた。

「そう、桜。アナタずっとあの木に夢中じゃない。そんなに好きなあの桜の木と同じでいいんじゃない」

「紫様・・・色々考えてた割に結構単純な理由ですけど」

「いいじゃない単純でも」

紫さんは少々むくれながら藍さんの入れたお茶を飲んだ。

「それに決めるのは私達じゃなくてこのアナタよ」

紫さんの視線が私に向けられる。私の意見を聞きたいようだ。

「私はそれでいいですよ。というより気に入りました」私は嬉しそうに答える。

「ほら見なさい。本人が気に入ったのならそれでいいじゃない」自信に溢れる紫さんの様子を見て、さすがに藍さんにも言えなかった。

「次は名字ね、自信に溢れる紫さんの様子を見て、さすがに藍さんにも言えなかった。

「次は名字ね、私としては桜にも八雲って名付けたいんだけど、また誰かさんから単純だと言われちゃいそうだしねえ」紫さんは視線を藍さんに向けながらいやそうに呟き、藍さんは視線を合わさないようにしていた。「いまの季節は春だから・・・霞雲 桜というのはどうかしら？霞は春の言葉だし」

成る程、霞も桜も同じ春を指す言葉だからか、合うんじゃないかな「本人は良さそうね文句ないかしら、藍？」「私に振らないで下さい・・・まあ、本人がいいならそれでいいのではないですか」

「決まりね。よろしいわね？霞雲 桜さん」

「せっかく恩人からもらった名前ですからね 文句なんて有りません」

こうして私、霞雲 桜の幻想郷の生活が始まった。

2 会合と朝食（前書き）

お待たせしました第2話です。思ったより時間がかかってしまいました、更新ペースは遅くなると思います。なんとか頑張ります

2 会合と朝食

あたり一面が寝静まる夜、活動しているのは夜行性の生物や妖怪ぐらいである。

ある一件の屋敷の一室、明かりがうつすら漏れているその部屋から二人の女性の会話が聞こえる。

「紫様、やはり桜は・・・」

「あなたの察しの通りよ藍、あの子そんじよそこの妖怪より強い力を持っているわ・・・ただ今の所本人はそのことを忘れるわ」

「そのことを桜には言わないのですね」

「あの子の力は強力であると同時に扱いが難しくてね、下手すると周辺どころか自分にも危害が降りかかるわ。」

幸い、本人は自分の事を忘れているし能力もこっそり付けた式が抑えているから暴走の心配はないわ、ただ私の式でもいつまで保つかどうか・・・」

「紫様の式でもかなわないとすると今後、万が一の事があつたらどうするんです？」

「その点は考えてあるわ」

藍の疑問に紫はフツ鼻笑いをして答える。

「こういう事はやっぱり専門家に任せないとね」

専門家と言う言葉に、藍はすぐに紫が何を考えているのか分かった。・・・つまり、博麗 霊夢に依頼するのですね」

「そう言う事よ、霊夢なら多数の封印術を使えるし、桜に弾幕やスペルカードを教えるには良い相手じゃない、あの子スペルカードに興味心身だったし」

今日の昼間頃、紫達から幻想郷のルールを聞かされた桜がスペルカードに興味を抱いていた事を思い出した。

「しかし紫様、霊夢がこの件を引き受けてくれますかね」

「霊夢だって代々続く博麗の巫女よ、幻想郷のバランスを崩すよう

な事が起こらないようにするのが巫女の仕事、霊夢だって分かっているわ」

「だと良いのですが・・・」

藍は不安げに呟いた

「それにしても珍しいですね。あなたが積極的に行動を起こすなんて」

藍はふと紫が桜に対して優しく接している事を思い出した。

「月や地底で起きた異変やあの不良天人の企みなどに比べれば、この件は可愛い物だと思うのですが・・・」

「・・・別に、ただの気まぐれよ」

紫は極普通に答えた。

「本当にそれだけですか？私には別の理由が有るように見えます。いえ、どちらかと言うと・・・」

「あまり主人に野暮な事を聴かないのが従者つて者よ」

その紫の一言は何かを言おうとした藍を黙らせた。

「申し訳ありませんでした、紫様」

「まあいいわ・・・。霊夢には私が直接会って頼んで見るわ」

人知れず行われたこの二人の会話は静かに終了した。

桜が幻想郷に来てから四日後・・・

朝の光が目に入り、ふと目を覚ます、年代物の掛け時計を見るといつも私が大体起きる時間帯を差していた。

体内時計は正確だなと思いながら布団から這い出て着替えていると、台所から音が聞こえてくる。どうやら藍さんはもう起きて朝食の準備を行っているようだ。

「相変わらず早いなーあの人」

そうつぶやきながらも着替えを終え、布団をたたみ押し入れに入れる。

そして日が差し込む障子戸を開けると、朝の日差しと少し冷たい

風が部屋の中に入り込んで来る。朝の日差しと少し冷たい風が部屋の中に入り込んで来る。

今着ている桜色でコーディネートされたこの服は、私の当分の名前が霞雲 桜と決まった翌日に藍さんが用意してくれた服だ。

藍さんはこの家の家事全般を1人でこなし、さらに他の仕事も苦もなく何でもこなせるすごい女性だと私は思う。それでも紫様には及ばないと藍さん本人が言っていた。

紫さんは妖怪の中でも頂点に立つ存在の1人らしいので、当然と言えばそうかも知れない。

ここに住み始めてからほんの四日間、私がここに住めるのも数日前に助けてもらった紫さんのお陰だ。

紫さんに会わなかったら今頃清々しく朝を迎え入れなかったかもしれない・・・

私が台所にきた時には既にいい匂いが漂っており、藍さんがまな板で何かを切っている所の後ろ姿が見えた。

「おはようございます、藍さん」

私が挨拶をすると藍さんがこちらの存在に気づいてにこやかな顔で振り向いた。

「おはよう、いつも早いね」

「自分でも驚く位の正確な体内時計があるので」

「ハア」つ紫様も毎日この位早く起きれば、私の仕事も少しは少なくなるんだけど・・・」

実は紫さんは1日の内、半日は寝て過ごしている。藍さんから聞かされた時は嘘だと思ったけど、紫さんを見て本当だと分かった。

「あつ、私も手伝いますよ」

ここに住ましてもらっている以上、なにか少しでも手伝いをしなければ申し訳がない。

「いいよ。もうすぐでできるから」

私と藍さんがこんなやりとりをしていると、

「おはようございます!」

玄関から元気のいい女の子の声が聞こえてきた。

「あつ、私がいきます」

藍さんにそう伝え私は玄関に向かった。

玄関には橙色の服を着て緑の帽子を被った少女が立っていた。

ただ、その少女の頭の両脇から生えているネコ耳、そして後ろからピョコピョコ動く二本の尻尾が普通の少女じゃない事を語っている。

だけど私はそれを見慣れているので変だとは思わない。もっとも初めてあつた時は珍しかったけど。

「やあ、橙^{ちえん}おはよう」

「あつ、桜!おはよう!」

お互い軽く挨拶を交わす。

この子は橙、藍さんに従えてる猫又の少女で、私が幻想郷に来た翌日に出会って最初にできた友達だ。橙は子供らしく人懐っこいので出会ってすぐ仲良くなり、藍さんがお姉さんなら橙は妹分といった関係だ。

いつもはマヨヒガという場所にすんでいて、毎朝ここ紫さんの家にやってきてご飯と一緒に食べたり私や藍さんと遊んだりしているが、藍さんは色々忙しいので大体は私が遊んでいるのだ。

「今日も遊んでくれる?桜」

「うん、いまの所予定がないからね」

「橙、桜、朝食できたよ」

「わかりました藍様!桜、早く行こう!」

「はいはい」

私達はいつも食事を取っている居間に向かった。

居間に来た私達の前には卓袱台に乘せられた朝食と茶碗にご飯を盛っている藍さん、そして・・・。

「あれ、紫さん？」

「おはよう、桜、橙」

紫さんが一足お先に朝食を食べていた。

「ど、どうしたんですか紫様？朝に朝食を食べているなんて珍しいですね・・・」

もしかして新しい異変が起きているんじゃない？」

橙が取り乱している、私もいままで紫さんが朝から起きているのを見たことがないがそれほど珍しいことなのかな？

「橙！紫様に失礼だぞ。紫様だつて早起きぐらいするさ」

「静まりなさい藍、まあいつもは寝てる時間だけどねえ・・・この時間に起きたのは桜、あなたに話があるからよ」

「私にですか？」

紫さんと同時に橙からも視線を感じる。私の過去について何か分かったのだろうか？

「まあとりあえずは朝食にしましょう。食事をしながら話すから」
紫さんに言われるがまま私と橙は席についた。

「前に幻想郷のルールを教えたことが有ったじゃない、その時の桜、弾幕やスペルカードに興味を持っていたじゃない」

確かに少し前紫さんから幻想郷について聞かされた時、私が一番興味を惹かれたのは弾幕とスペルカードだった。

特に弾幕はどこか懐かしい、前に似た事をしていた感じがする・・・。スペルカードは単純になんかかつこ良さそうだから

「両方とも幻想郷の妖怪から身を守るには必要だから学んでおいた方がいいと思つてね」

と言うことは私も弾幕が打てるようになるのだろうか？

「紫さん達が教えてくれるのですか？」

「教えるのは私達じゃないわよ。私と藍は色々忙しいし」

「橙もまだ未熟だからね、どうせ教えてもらつたらその道の達人に見てもらつた方がいいだろうね」

藍さんとはかく紫さんは別に忙しそうに見えないけど、それと後もう一つ気になる事がある

「私に教えてくれる人ってどんな人何ですか？」

実は幻想郷に来てから紫さんと藍さん、それと橙以外には人に会っていない

この家と周辺しか歩き回った事しかない、だから幻想郷の住民がどんな者達かは知らない。紫さんは妖怪に襲われないためだと外出を禁止させられたから

「私が最も信頼している者よ、名前は博麗 霊夢、博麗神社という神社の巫女よ」

神社の巫女さんか・・・

「霊夢は妖怪退治が仕事だからね、そういう者なら桜を安心して預けられるわ」

弾幕を使つての妖怪退治を行っているからなのかな。あと・・・

「預けると言うのは？」

「言葉の通りよ、あなたは当分の間霊夢の所に泊まり込んで、色々教わりなさい」

「じゃあ外出許可を出してくれるのですね」

「そうよ、しばらくの間私の家からお別れね」少し寂しそうに笑いながら紫さんは言う。別に戻ってこないと決まった訳ではないのに・・・幻想郷はそれほど危険なのだろうか？

「で、いつから桜は霊夢の所に行くんですか？」

隣で黙って聞いていた橙が口を開いた。

「今日の午後から」

「えっ？」

私と橙が揃って声を上げる。

紫さんは構わず話を続ける

「急で悪いけど、午後から霊夢の所へ行ってもらつわ」

「ず・・・随分急ですね」

紫さんが急な話を持ちかけるのは初めて会った時以来だなど私はその時の事を思い出していた。

「朝食を食べたら準備をしておきなさい」

はい、と返事をした後私は橙と目があつた、少し寂しそうな橙に藍さんが言葉を掛けた

「神社にならいつでも行けるだろう？会いたくなつた時に行けばいい」

「藍さんの言う通りだよ橙、お別れじゃあないんだからさ」

そう言つて私は橙の頭を撫でると、橙は少し恥ずかしそうに頷いた。そして朝食を食べ終わった私は準備をするため部屋へ戻つて行つた。

3 巫女とリボン（前書き）

お待たせしました第三話です。

相変わらずのグダグダ感ですいません。

次回からどんどん東方キャラを出していく予定です。

3 巫女とリボン

家の前には既に紫さんがいて、後ろには紫さんが操るスキマが開いていた。

「本来なら空を飛んで神社まで行こうとしたけど、桜はまだ飛ぶ事ができないからねえ」

クスツと笑いながら紫さんは呟く。

私はスペルカードには興味が有ったが空を飛ぶ事にはあまり感心がなかった、と言うよりなぜか飽きたと言う気持ちがある。飛ぶのは充分だと感じてしまうのだ。

「博麗神社ってここから結構遠いのですか？」

紫さんの飛んだ方がいいと言う発言や後ろのスキマ空間を見て、ふと思いきいてみた。

「幻想郷の外れの方にあるの、まあ人が全然来ない場所に在るからね、周りには妖怪が多く住んでるから、対策無しでいったらあつという間に妖怪に食べられてしまうわよ。」

成る程、確かにあまり知らない土地で妖怪に食べられて終わりなのは、避けたい所だ。

「だからスキマ空間を通って直接神社に行くんですね」

「そう言うこと、それじゃあ早速行きますか」

そう言つて紫さんがスキマに入つていき、私も紫さんの後を追つて行く。

前にスキマ空間の中を通つた時は結構歩いた気がしたが、今回は入口から少し離れた所に出口が見えた。これなら前より早くこの空間から出られるだろう、私はまだこの目だらけの空間は苦手なのでホツとした。

スキマ空間を抜けて、最初に目に入つたのは大きな広場の真ん中に立った神社の社だった。紫さんの屋敷よりは小さいがなかなか立

派な神社である。

周りは森に囲まれており、如何にも妖怪が潜んで居そうな雰囲気
に包まれている。後ろにはもうスキマがなく、この神社の物らしい
赤い鳥居が立っていた。

紫さんは神社の方へ歩きながら、目的の人物の名前を呼んでいる。

「霊夢、来たわよ、いるんでしょ」

程なくして神社の裏側から一人の少女が出てきて、私達に近づいて
きた。

「そんなに大声で呼ばなくても聞こえてるわよ」

近くにくるなりそう言った少女の容姿からこの神社の巫女さんだと
分かった。

ただよく見ると普通の巫女の服装とは違う所が幾つか有った、特
に特徴的なのは上腕部が無く腋が露出してゐる事だった。黒い髪に大
きな赤いリボンを付け、可愛い顔立ちは少し不機嫌そうな表情であ
った。この人が博麗 霊夢と言う人だろうか？

不機嫌そうな巫女さんを前を紫さんはお構いなしに私に話し掛け
た。

「紹介するわ桜、この腋が出ている腋巫女が博麗 霊夢よ。」

霊夢、この娘が前話した霞雲 桜」

「だれが腋巫女よ、てか私の話聞いている？」

と文句を言いつつ巫女さん・・・霊夢さんは私に近づくとじいっ
と私の顔や全身を一通り眺めながら何かぶつぶつと呟いていた後、
改めて私を見て口を開いた。

「さっきこのスキマ妖怪が言ったけど、私が博麗 霊夢よ。まああ
んたとは始めまして、と言った所かしら」霊夢さんは素っ気ない自
己紹介をした。態度からして冷たい人なのかも知れない。

「紫から話は聞いてるわ、泊まり込みで術を習いたいんでしょ」
先程と同じ態度で霊夢さんは言う、術とはスペルカード等の事なの
だろう。

「本当は人にあれこれ教えるのは好きじゃないのよね」

「ちよつと霊夢、これから教え子になる人間の前でそんな事言うのは・・・」

そう言つた紫さんは苦笑いをしている。

「まっ最近は特に変な騒動や異変も起きなくて、暇だったからね、いい暇つぶしにはなるわ」

・・・どうやら霊夢さんはマイペースな性格のようだ。

「結局引き受けてくれるんでしょ、桜の術の指南」

「だからあんたはここに来たんでしょ、こいつ連れて」

「分かつてるじゃない、さすが霊夢」

「長い付き合いだからね、有り難く思いなさいよ」

笑顔で霊夢さんとやりとりをする紫さん、心なしかどこか安心してゐたい、やっぱり霊夢さんは信頼できる友人だと実感した。

「ところで霊夢、アレ完成してる？」

ふと思い出した様に紫さんは霊夢さんに尋ねた。

「ええ出来てるわよ。注目通り強力な術を仕込んであるわ」

どうやら霊夢さんに何かの制作依頼をしたみたいだ、そして霊夢さんは何故か私をチラツと見た後に答えた。

「だったら安心ね、それじゃあ私はそろそろ帰るわね。あとはよろしくね、霊夢」

「えっもう帰っちゃうんですか？」

スキマを開いて帰ろうとしてゐる紫さんに私は慌てて尋ねた。

「ちよつと用事が有つてね」

「へえ、仕事は部下に任せて自分は寝てるだけのあんたに急ぐ用があるとはね」

霊夢さんがイヤミつたらしく言う。

大妖怪である紫さんに向かってそんな態度を取るとは、友人だからか度胸があるからか・・・、さっき腋巫女と呼ばれた事にまだ怒っているのかな？

「あら、腋巫女と呼んだ事をまだ気にしてるの？」

「・・・フンッ！」

どうやら後者の様だ。

「別に藍にすべての事を押し付けてる訳じゃないわ。藍にも対応できない事をするのが私の仕事よ。じゃあね」

紫さんはそう言うときスキマ空間に入って行き見えなくなった、スキマも閉じると無くなってしまった。

「まったく、あのスキマババアめ・・・」

霊夢さんはまだ怒っているのかいまだに小言を呟いている様だ。少しすると、再び私の方を向き、

「桜だっけ？何突っ立ってるの」

と言ってきた。急な問いに思わずヘツとする私、

「修行つけて欲しいんでしょ、やるからにはキツチリ教えてあげるから、早く神社に来なさい」

そう言うとき霊夢さんは後ろを向き神社の方へ歩き出した。

暫く霊夢さんの後ろ姿を見続けた後、我に帰った私は慌てて後を追いつける。

「霊夢さん！」

思わず大声で名前を呼んでしまった。霊夢さんは一瞬ビクッとする私の方へ振り向いた。

「なっなにょ・・・」

私は霊夢さんに近づき、そして・・・

「こっこれから当分の間お世話になります！迷惑になるかも知れませんが一生懸命頑張ります！」

・・・つい力んでしまった。前から思っていたが、私は変な所で力が入ってしまう性格みたいで、それで紫さんからかわれた事を思い出した。

あっけらかんとする霊夢さん、微妙な空気が流れ始めた頃、
「フッ・・・フッフッフ・・・フッフ・・・ハハハハハッ！」

霊夢さんが突如笑い出した。

「ハハハハハッハハハッ」

「あの・・・霊夢さん？」心配になったので取りあえず声をかけてみる。

「アハハ・・・ごめんごめん、紫が言ってた通りだったからね、変な所で力入れちゃう所」

「紫さんそんな事言っていたんですか？」

「あんたの事色々話していたわ、記憶喪失の事とかね」

そう言えば紫さんがそんな事言っていたっけ、けれども恥ずかしい所までは喋って欲しくなかった、もう遅いが・・・。

「まあそんなに硬くなんなくていいから、楽に行きなさい。」

あと別に敬語やさんづけしなくていいから、霊夢って気安く呼んで頂戴」

「いえ、でも私に取っては先生にあたる存在ですから」

「いいからいいから、みんなだって呼び捨てで読んでるし、それに先生なんて柄じゃ無いわ私自身修行嫌いだし」

確かに修行嫌いな人間を先生と呼べないけど・・・、本人が望んでいるのなら、

「それじゃあ改めて、よろしくね霊夢」

「こつちこそ桜。まあ修行やら云々は明日からにして・・・取りあえず神社に上がってお茶でも飲みましょう」

修行よりお茶を優先するとは・・・、やっぱり霊夢はマイペースな巫女だと改めて思う、初対面の私をあっさり受け入れたりどんな相手でも自分のペースを崩さないと人を寄せ付ける不思議な魅力がある。紫さんが信頼を寄せる理由も分かる気がする。

「そうそう、忘れる所だった」

神社の玄関前まで来たとき、ふと思い出したように霊夢が呟くと、懐から何かを取り出した。

「これあんたにあげる」

私に差し出し出された手には、

「リボン・・・？」

そう、赤いリボンがあった。しかしただのリボンでは無く、文字のような模様・・・お札に書かれているような文字が描かれていた。

「霊夢、これって・・・」

「桜って今記憶喪失何でしょ、このリボンにはね忘れた事を思い出し易くする呪式が仕込んであるの。つけ続ければ記憶が蘇る可能性があるわ」

「じゃあこのリボンをつければ私は私の記憶を思い出すのね」

「必ずと言う訳じゃないけどね、ただどなにも無いよりはマシですよ」

霊夢の言う通り可能性があるのなら、それに委ねた方がいい。

私は霊夢からリボンを受け取ると頭の左側に付けてみた。

・・・特に何も思い出さない、

「いつとくけど付けてすぐに効果があるわけじゃないからね」

やれやれとした顔で言うと言霊夢は玄関に入っていく、霊夢に言われやっぱりすぐにはダメかと再確認した私は霊夢の後に続いた。

しかし、リボンを付けた時、一瞬だが体を押さえつけられるような違和感はなんだったのだろうか？

主人公設定（前書き）

主人公 霞雲 桜の設定です。

物語が展開するのに合わせて追加設定をしていきます。

主人公設定

名前 霞雲かすみぐも 桜さくら

種族 不明（覚えていないため一応人間扱い）

能力 不明（同じく覚えていないため無能力扱い）

服装 黒いワイシャツに赤い短めのネクタイを締めており、その上から裾が長めの桜色のベストを着込んでいる。

下は桜色のスカートを履いており長さは膝に届く程度、黒いニーソックスと靴を履いている。

瞳の色は黒で髪の色も黒、髪型はショートカットで左端に霊夢からもらった赤いリボン（ルーミアが付けてるのと同じ形状）を付けている。

八雲 紫が幻想郷の外の世界で保護した少女。

記憶を失っており自分が何者かすら覚えていない。

成り行きで紫の所に世話になることになったが、紫の提案で弾幕とスペルカードを霊夢から習得するため博麗神社に泊まり込んでいる。

桜が幻想郷に来てからは紫の屋敷とその周辺しか出歩いていないため、幻想郷の住民は桜の事を噂程度しか知らないし、桜も住民達を見たことがない。

義理堅い性格で受けた恩は忘れず、必ず返そうとする。しかし少し天然が入っており、変な所に力を入れたり人の話を信じやすく騙され易い。年上には敬語で話し、同年代や年下には普通に話す。

実は強力な能力を使えるが本人は忘れている。しかし扱いが難しく自分や周りに多大な影響を与える危険性が付きまとう。そのため

紫が能力を封じる式神をこっそり付けさしていたが、今は霊夢がつけたリボン型の札で能力を封じられている。（桜本人も知らされていない。霊夢からは早く記憶を思い出すためと言われている。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2261m/>

東方早咲桜

2010年10月9日22時28分発行